



34
12
60

松野
勝名院

南總里見八犬傳第六輯卷之五上冊

東都 曲亭主人編次

第五十九回 京鎌倉小二天士四友と憶念を

下毛州赤岩庚申山の紀事

再說犬田小文吾の依り夫婦小辭別れて市川の宿と半ナラ且行徳へ立去。亡両親より行の告別をせをと笠をかげて、ほど程すと杏華院まであけられ。準備の揃を携く寺門に入り墳堂戸をひき桶索ねて汲揚る阿加井の吊桶。桶池を漏りぬれと袖濡れ。歎たの露の蘿離秋と外の卒都婆も懐る憂。身ひとつ身を以て。卷柏をぬ雨後の苔洗ひ流と手向の水。うき影もかた人の名をのせば。塔すうち對ひ額つてに向よ時を移し。けり。おあべなあされ。稍身を起して外面へ退た先とて坐す。萬里逆旅よ。

墓あるよ。やれがかの折竊よ鎌倉へ立クアリとあらまぢや、後彼又不繙び難く
今へ他郷へ移トとも両三月の程あれが、あれ且彼地ふ赴きくもひくふ里人ふ拂りも
向ぐが人の在處を定ふ知るよあん再會の日は意中を告てうづ推量ま違とあく。
同因同果の天主。證据分明あんや去歳より空ふ送りる月日のかよ虛あんに。
孤雁の更ふ侶を得て北地よ皈ろ歡ひあんかくて犬坂共侶ふ又大塚ホの四支を索く
環りも會ば石濱ふ抑函られ吾う人を報ふ不正た證人あり且曳ひひとそへども亦
一天士を獲く伴ひ。やぞうと面を具ふふ似たり。吁然也と腹裏よらひ決ら引提る。
笠を翳一と邊へく寺門をぬく薪樵ろ鎌倉を投ぐ。とく程ふ次の見み暁時ふ。
既ふ被地ふ着一と米町ある客店ふ草鞋を解く逗苗。ひどちもともぞつあひ
茶店尻掛酒舗衆人聚ふ所を世の雜談ふ耳を敵又假初ふ名もあみ人と
物ゆ言の次ふあら名たる女田樂豆開野とひすみのあんと宿所ハ何處と

外々く諸より知らぬと答へぬもあり又復讐の為体を偽へてうるものあれど
忌すありそ定ふ告ぞ。そが中少一箇の老人小文吾に向ひ答て索ゆ。宜閑野を
許す人のを殺せし折武藏の石濱より逐電してゆるび當所より至り。もひの不
石濱の千葉殿へ官領家と疎うね。あへもすを告られけん。の沙汰はもござらず
ど渠もこの義を察へ。その身の追捕を怕れもせ。薪を抱きそ火か近づ。あ地へ
入り来る。虚実い定ひ。終す。役見閑野の女子ふあは。親の冤家を覺
と。釋た時より姿を変て幾万人を欺だる。あは凄く死ぬのぞよこの地よ忌の
あす。件の情由ふうて。を自身へ也とも知らばぬ。有けん慢不渠が宿所を訊
とも今との甲斐歟のをや。惡棍を疑れて支黨をと誣られ。其の解ふ
と。我がりかんをと。用心ありと推禁。其がる人の實意。小文吾の忽地
曉き。且驚び。遂に望を失ひ。あの日ももう。旅宿よかづく。獨活。くをも。

又里人ふうれ如く現鎌倉の管領へち千葉氏の恩家。又水火送ふ相松。中
れべ常武が。轟れり。も。告。し。人。余。ゆ。自。亂。邪。正。を。辨。せ。ば。是。非。の。境。を。惑。ひ。を
取。そ。て。か。ね。大。坂。を。憎。一。と。そ。と。被。亂。智。が。の。ミ。ク。ひ。ふ。云。と。告。て。追。捕。を。頼。し
え。との。議。や。と。決。め。こ。然。る。を。こ。の。地。ふ。か。日。を。迷。ふ。が。勞。と。功。を。く。そ。う。す。ま。灵。く
して吉少一。心盡く。索。る。人。ふ。逢。ん。よ。ほ。も。か。死。里。ふ。迷。憾。一。と。そ。と。去。歲。す。三。び
三方へ別れ。知己の男女を。一人。や。あ。と。難。く。又。何。方。を。あ。る。當。の。翌。す。索。わ。く
べ。死。世。少。の。や。入。へ。あ。と。も。秋。す。月。下。日。も。胸。へ。休。く。ぬ。つ。れ。は。あ。き。の。あ。べ。と
ありひ沈。そ。鄙。語。の。獨。商。量。果。一。死。膝。を。抱。ぎ。消。せ。日。の。壁。す。向。ひ。そ。幾。遍。歎
息。の。外。か。り。と。忽。地。迄。と。そ。ひ。そ。と。日本。六。大。箇。國。廣。一。と。や。も。限。り。あ。凡。舟。轡
等。の。所。足。跡。の。至。る。所。東。西。南。北。四。維。八。荒。索。巡。が。必。遣。人。達。速。不。拘。ら。と。志。を
す。ま。お。ひ。う。や。も。や。れ。れ。あ。き。ま。と。つ。死。の。舟。機。共。六。臂。の。聲。也。蒙。く。り。慰。め。る。一。宵。の。月。明。が。この。地。を。立。充。そ。用。意。を

きうけは案下一生又説一生犬飼現八信道ハ去歳の七月七日の危難ハ荒芽山路を
越々て踏苗立塞り追る敵と防ぐ程不道節信乃莊助ホと別々あり
ち終不送不往方を知らばす即く追兵と殺退けく其處ともも如深山路不迷ひ
キーフ辛くて信濃を越く両三日雖邁々々道節ホ不絶くいあひぞのう一ノ心
あく安くぬ肚裏ふやう吾曲目ハ幾回とあく必死の厄不遭ふとゞも神明仏陀の
護ら在ゆ又瑞玉の奇特ホ依れ歟。身を恙あひを多ヘ大塚大山四箇代
友も整計のあへば然ればそ信濃路ホ誰が相識のあつて心當へて
めを素より往方を定めバ何處を投く索あべた進退既不度を失ひぬが中不
小文吾のと曳き革節を相伴て脱出く故郷へ還りけん往方ハ定タ不知られず。
朝五六日この地を索みて三箇の友のあをまへ且行徳へ赴たく大田を覗て相諭バ
これより外不了簡あうどと尋思する。彼此不旅宿を求めて索一ノモ一犬

士もどらあひとゆく七月も中浣水アリ一ノ木。やう極く不^{シテ}ハ絶く下終を望む
程ふの月のサケあま。三四日とひの日子ホ不^{シテ}行徳へ着とひの久安内知る
れ。古那屋の内す入らんとひ。ちらればそひをかくし戸を闇籠て人影ハ無。雪
ソクを訝りまう抜る戸戻ふ隻眼をよき裏面のやうと覗^シ余全く空房ホ
かくろなればせうとゆ不退ひく四鄰の人不詔^シふその人答^スさればよ小文吾
だづ六月下旬か辭家して遂^シ帰ら。老父ハ安房の親族許呼とされとく
彼地不^シ。がる也多不奴婢ホゆき身の暇^シとくせーす。又ゆふとくありやう。
といふ不現へあうとゆぞ今ラ古那屋の通家ある市川の大江屋ホ異^シうとも
あひゆ。とゆびとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
た。もととくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

歎な身を措みてや。これも安房の親族許。赴たるを今かくば。苗守ふを
嵩工と耳疎た婆々のとあり。嘆えりと痛いたと。告ふ驚く現る。
あれづとぞうふ歎然とて退たま。をかくもあべだすが後。かく外へく
應と人々を立てば。おもと。獨思念す。古那屋の叟も妙真刀自も。
安房の親族。里見殿。機れかん。ゆく兩箇の翁媼。後安忍似
なれども最心のとあたへ。往方もあびかりと。親兵衛がみかん。すやあふ
市川。大江屋へ赴たく尋問と欲するとも。あトへきぬ畠守の宿不声訛
たる嵩工耳疎た。薪水の婆々が何を知る。あらとても元を。すり安房を
なびて邁べくもあだ。ゆきもあの舊里へ還り。とよとよひ。大田がけのまで
親や里人や信かひ甚不審。かめ折敵不製れへせぎ。曳き單節へつゝ
ぞ。あらのまく間かすもか。あもみう身の敵地。且武藏を退たく。又とくも

走れ。とよ心を肚ふ向ひ腰ふ登へく。身を起せ。秋の日影の短くとも。體當ふ
物う。その宵の出船ふ便り。求く。終夜漕れく。江戸に赴た。翁も心へ送り
た。信濃路。扱て日よ歩く。夜ふ宿り。草むし急がぬ。身も板剣。袖も露
ぬ。小篠原岐嶋の脚坂もうち。過く。憂みのみ。翁は友人。あみ多も頼てた。
峯の楓葉色。あせども花の落。よ近づぬ。ともああ。す。甲斐。王城の
地と踏ふて。又何國へ。赴くべ。行客聚ふ。都會の地。人を索る。ふ便り
あん。とそべ心ひも。され。駆く京師。ふ。赴た。旅宿を定め。日毎々々。よ
名所古迹を。ぐり巡る。應仁以来。兵火。荒。い。京と。の。も。名の。よ。せ
穴似ぬ光景。れども都の。態。ま。ふ。愛。され。文。學。武。藝。の。師。の。門
を。張る。の。里巷。ふ。え。う。それ。現。へ。も。早。晚。ふ。相。識。を。來。て。送。ふ。訪。つ
訊。焉。今。茲。暮。て。立。丈。春。と。旅宿。ふ。迎。へ。う。登。時。現。ハ。や。う。限。す。有。

路費をゆく限りあられぬ旅寢をせん不遠謀かく後悔あらんれも年來
習得したる蟄々劍拳法を人ふ教へて口を鋤ひて逗苗中の諸雜費を省くべと
やひなければ如此きと親しむ人ふ相譚ゆ。舊道を捨て新道附くべと習俗
さればその人早ふ渠うそこれ彼弟子を汲引ふ初ハ一兩人あり一も武藝
世評ある隨ふ門ふ入り教を請ふとの僕へ盡しかづくからず。この時やも
現ハ久しく渠らころをされば人勸もども居宅を求む。貸座敷とうりよ
め。度を武藝の替古所やて雨あら日あら請う隨ふ弟子の宿所へ起て
幾人とも教けり勢ひかくの如く。現ハをあわともゆく京師ふ杖を駆ると
既ふ三年ふ及び。時ふ文明十二年。徽倉越か。翌年。之の晦月も猶り未く星
祀る比小豆一ヶ過中。多忙を憐む現ハをあは里とく起坐する。あれ四天士よ
別れ。より只顧索遣んとぞ東西百里を往復り。圖よ。京師ふ逗苗の
日教じり。今が多中下歳を隔て。ふかく昨宵ノ一夢ふ大塚信乃ハ大ハの
親共齋と抱き。犬山犬川犬田共侶。よこの旅宿ふ。ごひよ。最大恨事。を
解んとあらと枕ふ聲く鐘の音ふ驚覺く。僕れ。夜ハ尚刃の時ありた。
佛說ふ。泡沫夢幻頼む不足。ぬりあら遺憾。も限りかく。らればとく
又快く。彼五天士ハ異姓の兄弟骨肉。優モ刎頭の交り。を塵ふて恨を
うべ。祀れか。然ど。路費乞て。故をゆく旅宿。ゆく。子弟を聚へて。武
藝を教え。口を餉へ。名利を樂ふ。やがて。老幼順逆世ふ。多き人の命
期。かく。余命數の多くも。竭く。この終身。あら。やがて。四大士後ふ。傳。ゆく。
て。やがて。現ハ。誓す。背だ約を違へて。相別れを幸ひ。年來。京師ふ住ひて。一己の
名利を謀ふ。あれば。疑ひ。あら。やがて。誰う。然らば。ひとひ擇く
べ。やがて。死とも。朽ち。千載不滅の迷惑。を。や當所を立さう。ゆ。び。東よ

赴くべし。西國四國もすまへられど、朝かほゞ友達のみを関東まで生れたり遠く
京師をも越え西ふ苗がへくもあらず。さが中大江親兵衛ハ神隠トありと云ふ。
かく一ちきころの木やまとく免ぬる事もあらず。あとごのうとくまみやまく
去々歳この地をある比遠ち大和の葛城大峯近江愛宕高尾鞍馬深山を々示
まちの木。おひ登りて索ゆがどかの甲斐あらず。此度ひつて東海道を真直か鎌倉へと
攀登りて索ゆがどかの甲斐あらず。此度ひつて東海道を真直か鎌倉へと
そへども伊勢尾張より東ゆる諸侯をく割居して新闕のえられば旅人の往還
不便なり。ものゆゑ定く。かれバ近江路より中山道を下カベ。とあらひと不
ぞひ決らく松門人の甲乙史舊里を親族より猛小招き一義あり。すそ東国へ
帰る。この美を送りくはへかへといふ人を驚かく辭を盡して禁めしをも苗る
べくもあざれバ夏の趣云云と同門們不倦る程小現ハキ下日もそく立考とば
らども衆皆別を惜し。苗別の名席を開く是首の勅盃彼首の御饌
をひそて招き日の多忙をも。七月ハ過く八月ま既半か一冬現八竊よ

焦燥く頻ふ辞と起行の準備ふ他更もあらず。がんかんとやうわ。とド
銀の兎く贈りく路費の資ふとけり。ま亦程ふ現八を行繫を整へくを詰呈
門人ホふ別れて東へ帰る。前後ふ跟記先ふ立て逢坂山のゆうすを送りゆく
みの多うりを。やうゆふ推苗を終ふ袂を分や。よ。つそテぬ旅も急ぎれど。
その日ハやくと十里あまり。守山の里ふ宿りを投めて。舟船とゆく程ふ既より日を
歷く上野す。遭坂の里まで來かけり。三とを以来三回を。この山里を過れども。
あら坂ハ只名のを。らふ友共遭ふすも。あおりて荒茅山裏へ路の程も
遠く。切と旅の心ゆ。燒雪夫婦が戦没の迹を。アキモと雲のぬる明巍山
邊ふ進み入ると半日や。既至る件の山のほどり。彼焼迹ふ事くこれぞ。
草ハ彼此ふ生繁りく半餘焦れ。常盤木の枝を生。葉や布く復榮る。も
あれど有つ家へ迹を埋め。ゆび住る人も。忠臣孝子義姑節婦も。



時より遇ひバ人やも知らまじ。主の為ふ身を殺せども祀られぬ鬼とす。迄小旅
魂ハ鬼也。吟呻かえり。憐悲く惜むべし。これぞ彼を以て別れ友を以
うけれど。既に去り。徘徊。惆然とて嗟嘆不堪。暮ね間やと舊来一
かふ矣。又獨路傍の茅葺の露木袖濡れ。その夜を明魏山の麓から白屋。
曉を夜を現へゆき。上野よりて武藏相模へ赴くは是順路。かねども
去々歳の秋下巣まで。をやめられ。あや下路へ此度ハ下野ニ起たて。二荒山も
登るべく。かく陸奥の盡處まで足不信にて索あ。久吾四大士ハ鎌倉か。どば。
繁華なり。地ハかづく。戦々。僑居まぐわあ。と尋思を以て次の日又遭坂
峯立々て高崎川をうち渡り。前橋大胡室深津花輪梅雨入の里を
過る。かく行程ハ二日路。下野州真壁郡網町と喚。五里木本小字。秋
日初ノ尚高。余五里。六里も邇。やくべ。且くあやく懇。とあやく辭。やく
様。

その里盡處。茶店あり。檐下。吊せ。賣草鞋の間。より。見え。一挺の鳥銃と六
七張の半弓。傷の壁。並掛。うち。ひか。糸解。笠。引提。先
儿。尻。をうち。懸れ。ば。あ。ド。と。お。死。一箇の老人。ゆき。茶碗。汲。煎茶。の生
活。あり。脣。涅。さる。茶釜。あ。て。泡。た。せ。せ。縁。の離。れ。日光盆。來。せ。そ
を。こと。て。羞。る。を。現。八。右。手。取。あ。て。兩。三。吸。喫。あ。う。屢。後。方。見。え。そ。翁。この
弓。鳥銃。へ。何。の。あ。ふ。掛。ふ。ぞ。と。問。へ。ば。あ。ド。へ。進。み。あ。り。そ。ま。ご。知。一。召。れ。ず。や。森
处。より。五六。里。を。う。至。庚申山。の。あ。る。こ。も。入。煙。ハ。と。罕。そ。れ。ふ。う。て。動。ま。れ。ば。山。賊。
あり。て。旅。人。を。剥。畳。り。或。ハ。猛。獸。妖。怪。変。化。小。可。惜。命。を。と。う。き。め。年。古。三。不。四。多
あり。この故。小。白。昼。と。り。とも。獨。行。こ。の。里。す。郷。導。の。者。を。傭。す。身。の。衛。は。甚
き。こ。の。身。を。乞。る。耕。作。よ。暇。あ。だ。里。人。ホ。件。の。需。ふ。應。じ。が。う。僕。ハ。素。鶴。内。足。
猪。の。鶏。平。と。問。め。が。あ。う。を。知。ら。ぬ。り。の。あ。れ。ど。そ。う。を。如。く。年。老。れ。ば。今。ハ。山

。こそ きん うえ ま。いく まあよ ひる ひと あそ
せりの叔母件の庚申山へ半度ある魔所多く白日どももゆぞう人の怕かれるが
つや 一切うちのふことと詰れば鳴平眼を睸とぞ見効へ他郷の行客かれが縁故を
えぬあくびとぞ疑ひあく疎歎よ似たりあくらゐのる報あくさん言長くとも笑ふへ
あくあくのへうもん。あくはのふあそこのあく。
抑赤岩庚申山下野州安蘇郡ふあり二荒山と相距ると西のこゝ七里やて。す
みちり
あり路五里よあまれ。さればこの細苧の里よりやくと十町ああすやく前凸の
やまぢ。すで山路へ既やく登ると二十町ゆて巔ふ至り又下ると十町くろの所より銀山ゆて。
一里の間水澤を傳ふ路の苦辛へつべくもあくべかく又登りゆくと大約三
聖あまりゆて庚申山中第一の石門ふ到るべ。土俗れを庚申山の胎内寶と喚做
さうきむせん やまくわん。
より造化自然の石門をその廣たと方十間この處より進み入ると二十間許にて左
右ふ建る大石あり高サ各五六丈の形ニ王の如
金剛といひ。右端を那羅延と云。正統
念經親門正統
物よそもく。これ天工の至妙や。鑿みて鏤もぶ彷彌う。これあり奥へ入

江戸より
庚申山へ
行程も
懲谷(十童
くまぐれ)ト
中嶺(四里
中嶺あり
大原(三里
大原より
大間(二里
大間(二里
花輪(三里
ちるこ)ト
津入(三里
津入(三里
中嶺(三里
足尾(三里
唐山(五里

食怕れく絶くやうのをうりへ近屬中居松原の村間赤岩といふ地方下赤岩一角
武遠といふ一箇の郷士あり心飽志を猛くして名を防武藝の達人。一日その門人少く
告ぐゆかず。傳ゆく赤岩庚申山ハ千劍破神代。稚日靈尊素盞鳴尊猿田
日子個三柱の太神神謨不相謀ひて件の山を登じせり。石を穿く室を造り
橋を渡へて路を通へ住せり。神迹へきて数万歳の後皇朝四十八世の女帝
稱徳天皇の神護景雲元歳釋勝道志願不依く下野州二荒山を開拓初
かづさる。庚申山を攀登りく彼三柱の太神を親しく參みまつと世の口碑
傳れども今を百十餘年の星霜を歷る未だ胎内寶をうち過く件の山は
奥の院をえむをのめの極くや。見れ當國の郷士とて間近く住ま被高嶺の
奥とも見盡めば。莊客们が異形を耳怕をもろぬ似う。翌日夙に登山にて
数百年から蒙昧の迷ひを釋んとや。身を各位も同意すべし相伴べーといふ
宿

衆皆呆れ果て鮮齊一諫るやう先生の武藝勇力ゆく如右云ひもあひてぞ。
理りかくはとあらはるわくねど件の山路はと嶮へく且谷川を渡へうする自然の
石橋虹の如く若滑れて進みかへと故老の口碑ふ傳へう加旃彼山中を水精
あり或ひふ是数百載歷る野猫ありその猛犯と虎の如くとの変化測るべくば。
り謬く山中を迷ひ入るのあると忽地引裂啖せひ。あれのやうに先生也
宿へませひけん。されどそ露びても怕れず。深あら筋ど君子ハ取危邦更衣
孝子の巣牆の下を立せどよ。本文も少く。孝子の親をやうそく親ちうの
その子つるふ自愛して危難近づく。亦慈あうと云ふ。がく。賢慮を回らへて
宿へまへせひけん。されどそ露びても怕れず。深あら筋ど君子ハ取危邦更衣
孝子の巣牆の下を立せどよ。本文も少く。孝子の親をやうそく親ちうの
その子つるふ自愛して危難近づく。亦慈あうと云ふ。がく。賢慮を回らへて
かく怯せ。大約深山大澤や鬼魅妖怪もあらざり。武術を学ぶ何の為ぞ。
昔平維茂ハ隠山を惡鬼を退治し。又源賴光ハ大江山を妖賊を討夷らふ

あかや余は武士としての魑魅妖怪を怕れてやらず習ひ武藝もそん甲斐
あるぞかとて矢と刀を棄て農商出家がまく生業を易べたのかく又ばとく
只管の武藝を特と臂力と誇り人の諫を拒むあらず。あれ赤岩を氏と一かぎ。
あれト名づる靈山に登陟せば虚構は似う虎穴に入へばひづくてよく虎子を
獲かとあんやかくともぞ怕れぬ。これ決して誘引を翌の苗守を頼むうち
相譚ゆく俟なへと勢ひ悍く説破られく游く返すものか。そが中を允可は高弟
某甲某乙三四名師の宏言不焚されて恥しくやらひけ齊一膝を推進めく現
先生の卓見高論下々を夢の覚うべくほらく感服仕りぬ餘入をば俺们
をとも
翌の充供せ第くほゝゑる義を許をやうといふ一角歛びく連微妙くいれ
たり替古のか頭れくと頼へくとも然らばとく宿所を還りて翌の準備を為
らをがましる四人へちくと苗守せとひ弟子さへ翌を契りく僕共併み散事
子うれしく角太郎と喚れう惜むべ一正香の刀自へこの年の春世を早う
との子へ四う五つのじれり。さて又その夏の比迎られ後妻う窓井とう喚れへ亦
それ美人の姿をありざれとの心探へ前妻お劣れもや娶らぬまつと一。
初冬の比不至りてむづく入みれ怕そ庚申山へ登らんといひと良人を諫め
ひせどそその武藝を怙恃あゆ。ひそと隨ふ出立せを度ふ悔しく覺へど
束ふ身を固むくよかく弓箭を推乃へ從者史登飼の割箸を負へて庚
申山へぞ攀登る比も十月初の三日天明く霧く暖く世ひよ小春 日和ゆく。

庚申山の
奇絶を
こう設
こうと小
あく近
比松本
乐山字の
記文二編
あり之れ
令つる
べ一予彼
山へ登陟
の事あり
のを累
きも

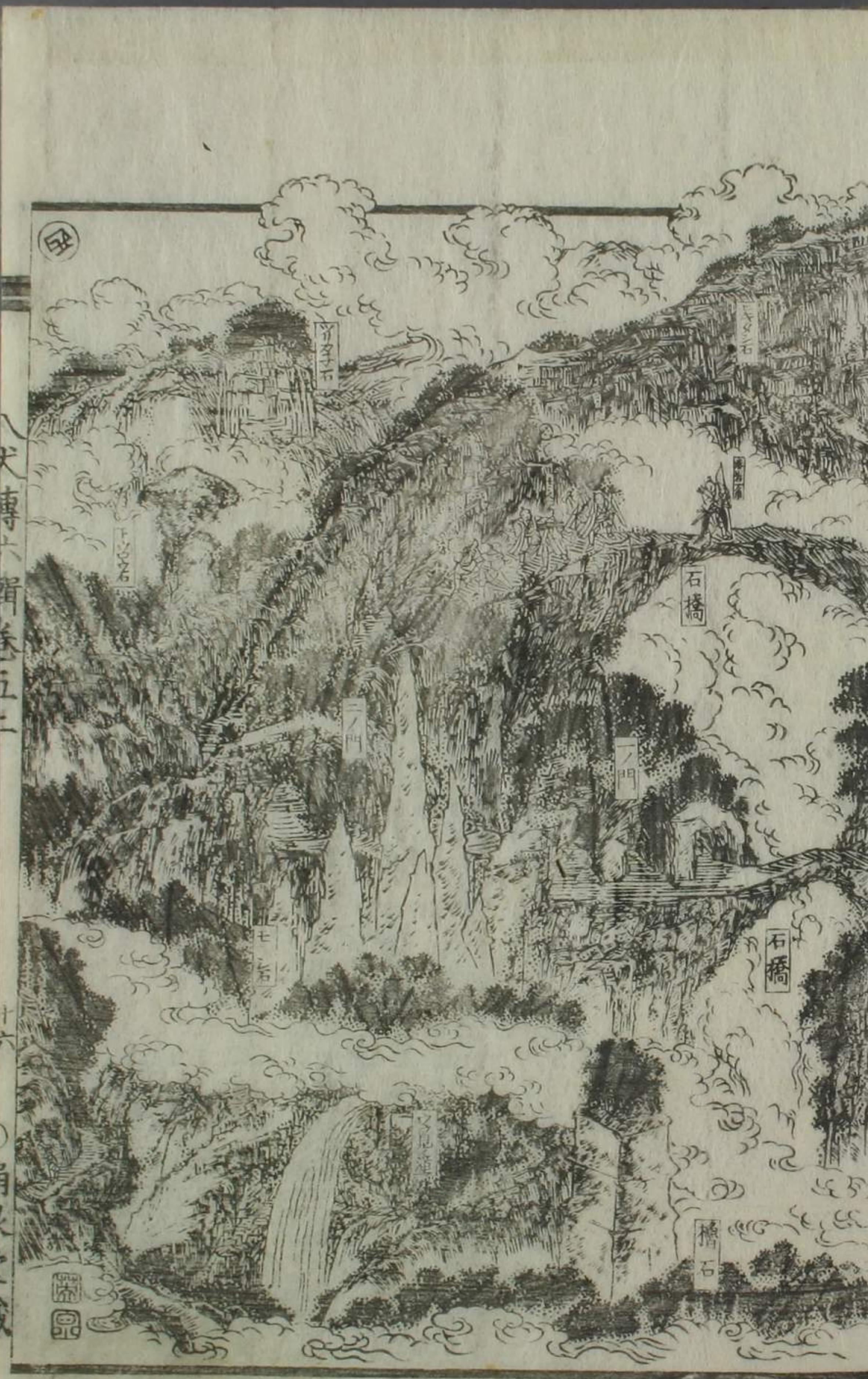
麓の千草冬枯れ。孤花雨露も珍しく朝鳥の声をまつても胎内竇の石門あり。二王石臺石など四方の眺望ふ暇なくこの處より一山の風景眼下ふ盡矣。奇絶ふ驚く可く是よりと下りゆくと従ふ二間むづりわれども之巖石の峻岨あり。鬼の鬚龍とよひつべし。是处より南下りゆくと亦複二町あまりやて前溪ふ石橋あり。其長一丈三尺廣さ五六尺をぐ。かくこの天工奇絶の石橋を幸く一見渡り寒れば前回不自然の石門あり。是第一の正門歛まく中て東に向へ大九十三丈中函ハ一丈二三尺左右ふ両箇の小竇あり。各九尺許ゆく。全体寃琴柱ふ似たり。是より二町あまりやと左の谷を出谷あり。数十丈あり。大石高く峰々塔の如く櫓の如く叢樹頂の上ふ生茂りく奇かびとぞ。又下ろヒニ町ありやと裏見の滝あり。その幅凡五六尺。その高さを量るべからず。ある二蔵山の滝不似そもの奇へ。あり。その隠れの曝布のほどより登りゆくと五町餘り右ふ五隻の舟も優り見る。その隠れの曝布のほどより登りゆくと五町餘り右ふ五隻の

大石あり色白くをとて高うり遙か瞻仰を所石中ふ文字顯れく庚申と讀え
如き。また文字石とのひべたのと又鵠鳴をと一町ゆゑく石門ありその大サ丈八九尺中央へ
九尺許をべーこの二の門より一町餘ゆ一トまちよ。燈籠ふ似る大石あり高サハ四五丈
をうちよ。又登ろと数百歩ゆく遙ふ成の山を眺れば洪鐘ふ似る大石ありその高龕
正ニ三丈蘿生。鬼絲負縁て蒼然と。亦奇く是より又下ると数百歩ゆく
石橋あり長サ七丈餘りあく恰虹蜺の引るが如く苔滑不雲蒸てその洞底の光
ざれば渡らんと。目瞑眩む足走難く進難よ。門入少ひあふ至く齊一その師を
諫め。先生膽勇武藝の徳も。昔より人のかなひぬ。この山ふ入りやまと既ふ過
半ふ及びて誰の感服せざる。射星よりてやくてのこよ風景大々。相
似るのとあべれど。還くせあへと送代ふ禁れども赤岩町へ頭を掉る
蓬船とをひすみの院奥の院まで至りてこの中途より罕く帰らぶ初よりて

来ぬて止まれ。あへある俟へられ走一きりふ登り盡へて瞬間よがり事べ。
そく。とひかく禁る袂をう拂ひテ杖突く件の橋を忽地を渡り果て。見る
間不を度カイテ門人未へ忙然と從僕共侶五六人あやう姐立在て齊一賀
痛るのを俟と二晌あすくゆく日ひもや大く傾けども赤岩ぬへかゝり草をす
平支があくとて送額を合へて商量果てかりのう今はとふこの崎を
度りて追索んとするのあされば所詮一圓宿所かうと内政よりと報て殿の
人を駆催してゆび事く索求んあゝとて虚き日を消え一人とてそ恚る。
還りんのあまくにゆくと一人がへ衆皆有理と雷同て遅暮如く故來一山
路を辿りくも辛てその黄昏か赤岩か宿所へ還りて如此々と後妻窓井小
報一ヶあたものとぞうり小伏沈をぞ號哭ぶされば田守せ一門人未も件の山音よ
駿騨ごろのゆきは首が三ス被首が四人膝をすえ額を鳴らすとあせんかくや
せすと群議を疑むるもあ。あれど武藝力量覚ある師のつづて命不
恙あべや山路不迷ひかひれど後れてありまやべ一派と歛ゆく俟ひひと
内政を慰ゆく通宵戸不立迎え室くわがへ戻りゆくものある。とくも程ふ天へ明て
日ひもや高く升れども赤岩峰の還くねば存亡定ゆくとそ猛不里人を駆催一隊
をぐ五六人弓箭鳥銃竹槍など器械々を引提る。人迷惑く先不立て庚申
年も攀登り既やく彼石橋の側う多め来づれども怕れく渡るのべかく又商
量不時を務せ冬の日影の傾て易く赤の半を過ぎ。かくへけくも更
果ト翌日又人數を倍してゆび来て橋を渡らん。そもそもかくても時後れしを
ゆすり急ぐと名とて徒歩引之ゆく。日申の比及不胎内賓を安んとせ時忽地
後方入ありて声うそ喚くると食駄をくえられ是則別人かく赤岩
一角ゆく。それくとぞう不且歎び且罵り引返て圍繞りて恙かと祝へ。

きのものはも還くあつた縁故を詰れば赤岩ぬ。微笑ときのふれ頗り不進ふ。
ひとり石橋を渡りてと先且彼此を見えふ。宝藏ふ似る大石あり又二重の壇み
伏るもあり又屏風ふ似るもあり。草苟の引牛と云ふ不似うもあり。この餘或舟或
金或へ鶴龜よ似る自然石の巖として立るあり碑配とて伏せりあり天造地工の
指妙かる見れども言葉ふ述きごく画くとも筆ふ写し易く。これより岩窟敷
所あり上古穴居の址あり既ゆて登盡を。前面は三箇の窟室あり是
則奥の院なり駭然として向かれば屹ち屹ちその高さは二丈三尺碑も峻ち
あり嶮岨を近づくべく。その窟の形は中宮へ□ゆく左へ△右のことを○
かりける便是天地人の三才を象るゝの狀その窟口の廣さとあく八九尺あるべ。
所謂稚日靈尊素盞鳴猿田日子と共に三神遷古鎮座の舊蹟あん取
る事も、うのみま。りのまみうちある。

諫と拒て一角庚申山第二の石橋を渡る圖



水も亦膝を過ひば右の腕を傷むるのを命ふ恙をされど索の絶する吊桶ふ
等く人揚ざれバ弥勒の世まで出く帰らんよりか。とくも程ふ日へ暮れて溪
底ふ天を明せ一々頗りお飢く堪えり。つぶせ。と四下を考ふ巖ふ岩菌の
生えを飽まく採く飢を凌ぎ。やうとも登る路あり。欲とそ彼方是方とも程ふ
足懸りよ見处あり。この山どうも藤蔓の上より長く降りゆ。こゝ究竟と
あら娛くも縋着ての岩稜ふ足踏掛け辛くて攀登ると半日あまりゆ
多く故の山路つかず今あいこまで來ず折らず各位の後影を遙よろび
ぬ。一五十を説示せば火入奴隸里人ホ駭嘆せざるもすくとの高運を
相賀て且勵るて大々こゑに恥く胎内竈賣ふ憩して割箒の飯の送りを
聞たく羞るるものあり或ひ又その衣の溪水ふ濡れく事ど乾くぞ處をみ頗壞の
邊なりを脱更さく疲を勵るるものあり。あくあれども赤岩ぬへ氣力日ぢろふ

異物とかく衆人を勞ひて是へ途より帰し遣し山人と後者のもおも宿所なか
來されば内政只死する人の甦生れ心地してその歎びとばら尚仙角太と云ひ
天性孝心備まじん釋らうかふきあらず。かくぬ親をそひ居て昨夜ハ睡りゆゑも今
慈かくかすみ。親の袂ふ黄縁て同慰るものと可愛。これより親族知己里人一人をれば
又一人詣來そ縊の悦びを述かぬの少く。一匁をうりハ庚申山の物なり。日を消す
家内賑しく赤岩山の剛勇を感せぬものか。すこせぬ。ゆへ懲る氣色もぐ入らふ
も。對ひて件の山へ昔より人耳怕して登らぬ。山虫毒蛇猛獸ゆく蘂草奇石銀
錫銅鉢奇石蠟石多うゆの誠ふ海内無双の神迹。実ふ別世界の仙境。愚按
も。疑ひく。神代の山陵ふわにや某が謬て水滸ふ落ても恙なく還り。とぞ
魔所かぬ。各賈察せよ。今より一て後見ふ等。祀志あらんむか必登山
更と鼻蟲ゆく。誇る。この一條ハ寛正五年冬十月の事。さればとぞも指

あらゆる翌日黄道吉日あらかじめの準備をあらへとて駆く手どりを喚おを。締の
あらを告あらされば齊一類を祓へて應ひて立わけるがく次の日犬村ぬへを。
先角太郎との額髪を剃りて元服の義を執行ひ養父の諱の一字を授けそ。
犬村角太郎禮儀と名告くせ女兒離衣とあみ神を摘きせ歯を染さしくその
宵里入甲を媒介不懲り傭まく婚姻愛にて整ひ氣が窓の竹千歳を壽に替瓦
松小萬代を笑えと相応へ新夫婦を親へゆく里入ふ。鄙史類あらうと
ひきはれ浮世の月と花盈れば鬱々ひやく歡びの果ひ又哀も遠く大村
ゆの内政へあ次の年の秋のうち臥せより鍼灸茶餌の驗あく五十
十足らぬ齡を遂にわすへなりやけをがる歎たのうも添て犬村ぬへもみ冬
より類中とやんやくち臥せより枕あく病と二年あるくよくこと今茲の
春の比黄泉の客とあらぬ齡へ六十ありあべてまる程小角太郎の娘父母前後の
病牀の上へ終日枕方を去らむ夜も通宵帶を解ぐ夫婦心をひらかず。看
う冊を療類祈禱ふ醫師を擇え驗者を便りて長短月日を忘もかく心の誠を
尽しめ孝行の甲斐あく余数限りあれがまべ。是より先赤岩を被後
妻の窓井とあら二男牙二郎の三秋四ツ不育ひ比一日頃死をもす。赤岩
めへ妻一人をものもあひて年来を歴る程ふの妻へとふかく不戻の落つゝもの
かくて或へ半年或へ一稔立や立ぬひあらゞく身の暇をもやり又逐電を
あらわす。かく置替られふ赤岩の秋の比武藏のことを流し禁め船中と
ひやくあらふ被ひんく程もあく正妻を推のほさんと二とを歴えとて大邸
あら。宿所あらる失婦の世をかく赤岩を詣來く親の安否を訪へ程ふ犬村ぬへ
優しく送財の糧ありふ入の噂よ船中へ良人ふ薦ゆく角太郎夫婦比のを呼
とう。兩家をひらふ合意件の金を畧へあらうとあらうとて角太とあらハ実父の

招が不歡びて取るのもどうあつた家の田地も人ふ預け。雑衣との共侶ふ赤岩が
来て同居をれど赤岩叩へ子もかへて。又彼一男の才二郎とめん心をばとく頑固
ゆく兄を兄とも呼ひて角太郎とめん。惇庵三方四表の機を包て。肩孝悌を守
られへ人の事で死とふ死。なま一程不難夜とみ。今茲の夏す身をかくす。一
彼鳩鷹の船虫が豫て伎倆へとひそむ。雑衣とひ赤岩めと情由あらかじ
と立て血を洗ひ恥を辱む。ひとと立て血を洗ひ恥を辱む。ひとと立て血を洗ひ恥を辱
ひゆきぬ。えぞう。妻の義理わす養家の女兒従母兄弟を重端やりふ。身ひら毛もある歎
ひゆきぬ。妻を有して既からぬ三四ヶ月かうとをみせり。況て歎苦亦増々雑衣とひ恨み色。
涙小袖ハ折れども乾生とがれ濡衣の霎時。浮世の笠半引急逝のをとくと彼
媒合被立て泣く聲をあひぬ。とをうすて猶治へ。角太郎めへとまかくと。

久保多良の懲されば遂不勘當せられ。大邱ありて奉る金銀調度を
置土産。田園へ不推苗。身の追跡をし。世を形ひてやひけん。赤岩村と大
村の間の田舎の亭を返壁とう呼べる。地方ふ草庵を彌びてす。ざげ貌半俗
中。そぞろひ法師も不才と彼をすまへひのあり。と痛恨すが。僕はその初
稽戸。ひさし赤岩叩へ花主。彼先生へ最大野味を嗜み。月の中を幾遍と
中買へて。脣疎うだ交加をあれ。件の口舌の折もめ紀令。もふう。臭氣を
ゆす。とあすり貰へて説誇り。花主甲斐かへ入事へ。影さく鳥の驚て。外
面猛不平。とか車益。やれど。庚申山の乗轡。すり與ふ乗へて。やがて。とある
まひんと。漫不時。と移へ。未の半過。までも。をの足を駐す。許ゆと賠詰めり。

里見八犬傳第六輯卷之五上終

